

立教大学ジェンダーフォーラム 2025 年度公開講演会

「これからのジェンダー平等」

日時:2025 年 6 月 19 日(木) 18:30~20:00

講師:江原由美子氏

会場:池袋キャンパス 14 号館 D401 教室および zoom ウェビナー

2025 年度公開講演会では、日本でフェミニズム理論を牽引してきた社会学者の江原由美子氏(東京都立大学名誉教授)をお招きし、「これからのジェンダー平等」というタイトルのもとご講演いただいた。

欧米社会での「極右ポピュリズム」勢力の台頭など、ダイバーシティ施策への逆風が世界規模で巻き起こる現在、「ジェンダー平等」を再考するのが本講演の目的である。

近年、マイノリティへの是正措置として多くの社会で導入されてきたポジティブ・アクション(アファーマティブ・アクション)に対し強い批判がみられる。たとえば、日本では、大学の理工系学部の学生数における「女性枠」の設置や、教員公募における「女性限定公募」への批判がそれにあたる。この背景には、格差拡大によるマジョリティ側の生活状況の悪化があり、ダイバーシティ施策がマイノリティを「特別扱い」しているという反感を一層強めている。

江原氏は「社会的カテゴリー」に基づく差別意識は弱くなったように見えるが、いまだにマイノリティへの差別が継続している現状について、「アンコンシャス・バイアス」や「マイクロアグレッション」という概念を手がかりに、「無意識の差別」におけるマジョリティの特権性とそれを生み出す差別的社会構造の変革に目を向けるように説く。

それでは、ダイバーシティ施策の支持・反対において男女格差が拡大するなか、差別的社会構造の変革としての「これからのジェンダー平等」とは何か。江原氏は、齊藤早苗氏の著作『男性育休の困難―取得を阻む「職場の雰囲気」』(2020 年、青弓社)の「仕事優先の時間意識ジェンダー」を参照し、「性別」以外の境界線をあえて見出すことで、男女間の対立を回避しながらジェンダー不平等を生み出す構造について問題提起できるのではないかという。たとえば、家事育児時間が女性に偏ることは「男は家事をしなくてよい」という男性自身の役割意識の問題というより、「仕事優先の時間意識」を生み出す社会構造の問題であり、男女ともにその構造の変革に取り組むべきものののだ。

江原氏は「ジェンダー平等」実現の可能性は「ジェンダー平等社会」を男女がどれだけ理解し



ているかにかかっており、問題をすべて「性別」に還元して説明するのではなく、そこから一時的に距離をとりながら性別問わず連帯していくことが必要ではないか、と締めくくった。



質疑応答では、女子高・女子大の意義、ジェンダークリティカルフェミニズムによるトランス女性へのバッシング、フェミニストにとっての結婚・出産経験など多岐にわたる問いについて活発な議論が展開された。

(ジェンダーフォーラム事務局 大野聖良)